

「避難指示が出ました」

薩摩川内市
滄浪地区

通行止め懸念 県道使い移動

九州電力川内原発の地元、薩摩川内市滄浪地区では、20日午前10時半に「放射性物質の放出の恐れがあることから、避難指示が出ました」と防災放送が流れた後、住民らが滄浪地区コミュニティセンターに集まった。氏名などのチェックを受けると、参加者約20人は自家用車に横したレンタカーやバスに乗り込み、津波などが起きた場合通行止めが懸念される川内川沿いの県道を通り、避難先に向かった。

【宝満志郎】



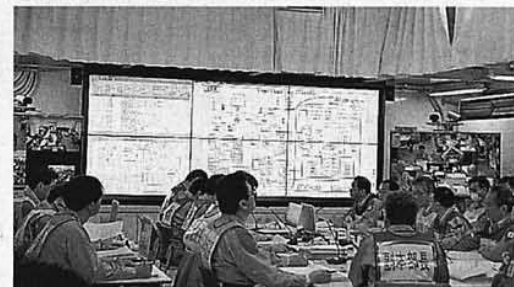
③集合場所の滄浪地区「コミュニティセンター」で担当者からチェックを受ける住民ら④滄浪地区の住民を乗せて川内川沿いを走る避難バス⑤いずれも薩摩川内市久見崎町で



⑥防護服姿の警察官らが見守る中、避難のため施設を出る入所者ら⑦薩摩川内市城上町の高齢者福祉施設で⑧九電の福祉車両で椅子ごと乗せられる入所者⑨薩摩川内市寄田町の高齢者福祉施設で



自衛隊のヘリを使った要援護者の搬送訓練⑩薩摩川内市寄田町で



川内原発内の緊急時対策所で訓練を行う九電社員ら

放射線量を自動送信

モニタリング
ポスト設置 練習通りスムーズに



可搬型モニタリングポストを設置
する県職員と九電社員

県の避難施設調整システム
の訓練が実施された薩摩川内市城上地区では、県職員と九電社員が市立城上小に可搬型モニタリングポストを設置する訓練に取り組んだ。このモニタリングポストはバッテリーで稼働し、測定し

た放射線量を2分ごとに県環境放射線監視センターに自動送信する。準備も含め5分程度で作業を終えた県環境林務課の江下伊織さん(27)は「練習通りスムーズに設置できた」と話した。

【杣谷健太】

県庁で避難施設調整システムの訓練に取り組む県職員



調整システムで初

県庁・訓練 避難先選定など

県庁では、原発30キロ圏の緊急防護措置区域（UPZ）内の一部住民と10キロ圏外の医療機関や社会福祉施設を対象に、初めて避難施設調整システムを使った避難先候補選定や連絡などの訓練があった。

保健医療福祉課や原子力安全対策課などの職員計14人が、風向きに応じた適切な避難先を選択し、避難を始める施設や避難先の自治

体に電話やメールなどで状況を説明。最適な避難経路も選び、病院などに伝えていた。

塩田兼一郎保健医療福祉課長は「おおむね想定した通りに進められた。実際の災害時にそれぞれの担当者と連絡が取れるのか、災害の影響が道路にどの程度出るかなどが分からないので、詳細を詰める必要がある」と話した。

【津島史人】

スクリーニングも

医療機関など「課題洗い出すため」
300人参加

川内原発から約40キロ離れた鹿児島市北部の市立河頭中では、薩摩川内市民や避難バ

スに対し、放射性物質の汚染状況を調べるスクリーニングが実施され、医療機関や自衛隊などから約300人が参加した。県のスクリーニング担当者は「一部の住民だけが参加した訓練でも混



課題を洗い出すための訓練と考えている」と話した。

【関東晋慈】

避難先でスクリーニングを受ける薩摩川内市民＝鹿児島市の河頭中

入所者らバスで避難

5⁺区内の「乗り降り足痛い」
高齢者施設

川内原発の5⁺区内 「わかまつ園」(薩摩
にある高齢者福祉施設 川内市高江町)では、



消防職員に付き添われて避難するグループホームの
利用者―薩摩川内市高江町のわかまつ園で

グループホームの入所者ら13人が防災訓練に参加した。避難指示発令の約30分後に避難用の消防のバスが到着したが、乗降口のステップが高く、乗り込んだ入所者の上江川フキさん(92)は「バスの乗り降り足が痛かった」と訴えた。

浜田時久園長(66)は訓練について、計画通り避難準備から避難開始へと段階を踏んで準備できたため「スムーズだった」とした上で、「避難計画が現実的かどうか確認する訓練になり、初動体制と連絡体制を整えることが大切だとわかった」と話した。

【杣谷健太】